

薬師の森遺跡(第3次調査)

大野城市教育委員会



写真1

薬師の森遺跡は大城山から西側にのびる丘陵上に位置し、乙金3丁目一帯に広がる遺跡です。遺跡の名前は、乙金3丁目にあった「薬師の森」という小さな森にちなんで名づけられました。昭和のはじめ頃まで、通行人の休憩場所として親しまれていたそうです。

今回は平成20(2008)年に土地区画整理事業に伴い実施した、第3次調査について紹介します。今回の調査では縄文時代～平安時代末・鎌倉時代初頭にかけての遺構が発見されました。主な遺構として、おとし穴・あな・たて穴・なな住居・ほったて柱建物・かま須恵器の窯に関連する遺構・もつかん木棺墓があります。

写真1は平安時代末～鎌倉時代初頭頃(約800年前)の木棺墓から出土した青磁です。碗が2点・皿が5点あります。碗の内面には花あるいは雲を表現した文様とキノコ状の文様を描いており、皿の内面にはヘラによる文様と櫛状の工具によるジグザグ状の文様を施しています。碗は龍泉窯系青磁、皿は同安窯系青磁と呼ばれるもので、両方とも12世紀後半頃に中国(当時は宋)の南部で焼かれたものです。当時、青磁や白磁といった陶磁器は全て海外(主に中国)からの輸入品でした。そのため大変高価で貴重であったと考えられます。

写真2は木棺墓から青磁が出土した時の写真です。木棺墓は長さ1.8m、幅0.8mの長方形をしており、^{てつきぎ}鉄釘が出土したことから遺体を木棺におさめて葬られていたことがわかります。青磁は北側で7点まとまって出土していることから、北枕の状態^{ほうむ}で埋葬されたと想定できます。1つの墓から青磁がたくさん出土することは非常に珍しく、葬られた人の経済力や階層を考える上で手がかりとなります。この人物がどのような地位にあったのか、青磁をどうやって入手したのか、など興味は尽きませんが、今後周辺の調査を通じて解明されていくことでしょう。

写真4は落とし穴の跡で、シカやイノシシなどを狩るための罠^{わな}と考えられます。長さ1.8m、深さ1.2mほどの深く大きな遺構です。穴の底で直径5cmほどの杭の痕跡が見つかりました。これは穴の中に落ちた獣が、地上に出られなくなるように穴の底に木や竹などを仕掛けた痕跡と考えられます。遺構の中からは縄文時代早期(約8000年前)の土器の他、石の鎌^{やじり}が出土しており、付近で狩りをしていた様子が想像できます。

写真5は古墳時代後期(約1400年前)の竪穴住居跡です。一部が壊されていますが、本来は5m四方の正方形であったと考えられます。住居の壁際には竈^{かまど}(写真5右側)が残っていました。古墳時代には集落が営まれていたようです。

この他、奈良時代(約1300年前)の遺構として須恵器の窯跡に関連する遺構があり、たくさんの須恵器が出土しました。付近に須恵器の窯跡があったと考えられますが、残念ながら窯本体は残っていませんでした。

今回の調査の結果、調査地では縄文時代～平安時代末・鎌倉時代初頭に至るまで人々の暮らしが連綿と続いていたことが分かりました。各時代の遺構・遺物は当地域において貴重なものですが、特に木棺墓の発見と青磁の出土は非常に重要な発見といえるでしょう。

